

肩野物部氏と鉄・鉄器生産

-岡山と交野の結びつき-

交野市教育委員会 真鍋成史

1. はじめに

岡山県下の肩野物部氏について取り上げたのは 1970 年代、斉藤孝・八木意知男・真弓常忠氏らであり、いずれもが製鉄集団と位置づけている。その理由として、肩野物部氏の屋敷地のあった場所が、後に美作国一宮である中山神社となり、そこが『古今和歌集』「大歌所御歌一〇八二番」で「まがね吹く吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」と呼ばれ、実際にこの神社周辺からは古墳時代から奈良時代にかけての製鉄遺跡が確認されたことによる。このほか、行田裕美氏らによる中山神社や仏教寺など肩野物部氏との縁の深い社寺に関する考古学資料からの考察など興味深い論考もある。

この肩野物部氏とは、その名前が記すとおり河内国肩野郡（現在の交野市・枚方市）に由来する氏族である。それが、どのようにして離れた岡山県に点在するのか、興味深いところである。私はこれまでに津山市から岡山県北部（旧・建部町）の製鉄遺跡や肩野物部伝承のフィールド調査を行い、論考を発表してきた。本論では、これら研究を土台として、古代における製鉄集団の成立と中世における彼らの変容の過程について再度検討してみたい。

2. 津山市から岡山市にかけての製鉄遺跡について（図参照）

まずは、私がフィールド調査を行った津山市より以南の製鉄関連遺物の散布地や津山市教育委員会などが調査を行った製鉄遺跡について取り上げてみたい。

津山市には多数の古墳時代から奈良時代までの製鉄遺跡が見つかっている。同市周辺の製鉄遺跡のうち、金属学的調査を次の 13 遺跡で実施されている。

1. 緑山遺跡（砂鉄系製錬滓／飛鳥時代）、2. 東蔵坊遺跡（鉍石系製錬滓／古墳末～飛鳥時代）、3. ビシャコ谷遺跡（砂鉄系製錬滓／飛鳥時代）、4. 押入西遺跡（砂鉄系製錬滓／古墳末～飛鳥時代）、5. 狐塚遺跡（鉍石系製錬滓／古墳末～飛鳥時代）、6. 一貫西遺跡（砂鉄系製錬滓／飛鳥～奈良時代）、7. 別所谷遺跡（鉍石系製錬滓／奈良時代）、8. 大畑遺跡（砂鉄・鉍石製錬滓／古墳末～飛鳥時代）、9. 小原遺跡（鉍石系製錬滓／飛鳥～奈良時代）、10. アモウラ遺跡（砂鉄・鉍石製錬滓／古墳後～飛鳥時代）、11. 二宮遺跡（砂鉄系製錬滓／古墳末～飛鳥時代）、12. 大蔵池南製鉄遺跡（砂鉄系製錬滓／古墳後

～飛鳥時代)、13. 美咲町小原地区矢引田(鉾石系製錬滓/奈良時代)。

これらの津山市及び美咲町の製鉄遺跡は岡山県の東部を流れる吉井川水系に属しているが、鉄鉾石・砂鉄をとも使っているところに特徴がある。この付近には鉄滓を副葬した古墳も多数あり、そのことから製鉄集団が多くいたことが分かる。

次に誕生寺川流域は、岡山県中央部を流れる旭川水系に属しており、平成7～9年に誕生寺川流域での製鉄遺跡の分布調査を行った結果、これまで分かっていた美咲町井の野元たたら、岡山市(旧・建部町)豊楽寺大池以外に、新たに5地点で製鉄遺跡を確認し、合わせて採取した資料の大澤正己氏や平井昭司氏の協力により分析調査を行った。

14. 久米南町北庄地区秋宗(砂鉄系製錬滓/平安時代)、15. 久米南町松地区荒神池(砂鉄系製錬滓/平安時代)、16. 久米南町上ニケ地区金屎池(砂鉄系製錬滓/平安時代)、17. 下鞆地区金山池(砂鉄系製錬滓/平安時代後[一〇六三年])、18. 岡山市川口地区大正池(砂鉄系製錬滓/鎌倉～室町時代)、19. 岡山市豊楽寺地区大池(砂鉄系製錬滓/奈良～平安時代)。

新たに見つかった遺跡は、立地や採取した資料の形状からみて、平安時代から鎌倉時代にかけての製鉄遺跡である。これ以外の誕生寺川流域の製鉄炉は津山市の各遺跡よりも大型化している。津山市周辺の遺跡との違いは誕生寺川流域では製鉄原料には鉄鉾石でなく、すべて砂鉄に切り替わっていることや、滓の組織も銑鉄が生成された時の組織を持つものが多く、原料の変化と炉内温度の高温化がなされ、このことも中世期の製鉄であることを裏付けるものである。津山市あたりではあまり認められなかった鍛冶屋や鋳物師に関する地名もこの誕生寺川流域には多く存在していることも特徴である。

3. 岡山県下の肩野物部氏伝承について(図・表参照)

では肩野物部伝承を見ていきたい。私は文献などを調査し、斉藤孝らが調べたものと合わせて13箇所、肩野物部伝承地を確認した。主要なものを取り上げると、まずは中山神社である。『中山神社縁由』や『作陽誌』によれば、肩野物部乙磨という人物が、元は中山神社創建前(707年)に、大穴持神をこの地に祭祀し、彼自身は社地の東南4町で大きな屋敷(方敷里)に住んでいた。しかしある時、老人の姿をした中山神とサイコロによる賭け(双六)を行った結果、屋敷地ともども取り上げられ、屋敷地を移転するのである。その移転先の屋敷地は長者御前と呼ばれ、旧・嬉石神社(現存せず)の社地と伝えられる。

その後、自分の祀る大穴持神の神威が衰えることを妬んだため、家司や親族が死に絶えてしまいそうになったため、さらに人贄に代えて鹿を毎年2頭献ずることを約束して南部の弓削庄に移り住むこととなったと伝えている。

そのほか、周辺では大蔵池南製鉄遺跡のすぐそばに、肩野物部氏のものとする長者屋敷地や、そこから西にある善福寺の成立として、肩野物部氏の妻の建立による尼寺であると伝えている。

それでは、次に親族ともに移り住んだ弓削庄(誕生寺川流域)についてみていきたい。『作

陽誌』などによれば乙磨が移り住んだ弓削庄には彼の屋敷跡があり、「内田屋敷」と呼ばれていた。乙磨はこのほか仏教寺を建立したとも伝え、そこには肩野部塚と呼ばれる宝篋印塔も今も残っている。移住後、乙磨はある年鹿贄を怠ったため、再び祟りが起こり、そのため中山神の眷属である猿神（シコト）を勧請し志呂神社を建て、弓削庄の庖谷において鹿贄の祭りをを行うようになったと伝える。

肩野物部氏は伝承のほかにも古文書にその名前が記載されており、実在が確認されている（写真参照）。岡山県古文書集にみえる法然上人が生まれたとする誕生寺、そこにある鎌倉時代後期の阿弥陀如来立像の体内文書からはこの仏像を作ることに寄与した「かたのさたむね」や寛文十年（1670年）に記された古文書に豊楽寺の末寺を建立した「肩野部忠元」の名前が見える。鎌倉・室町期に実在したことが分かる。

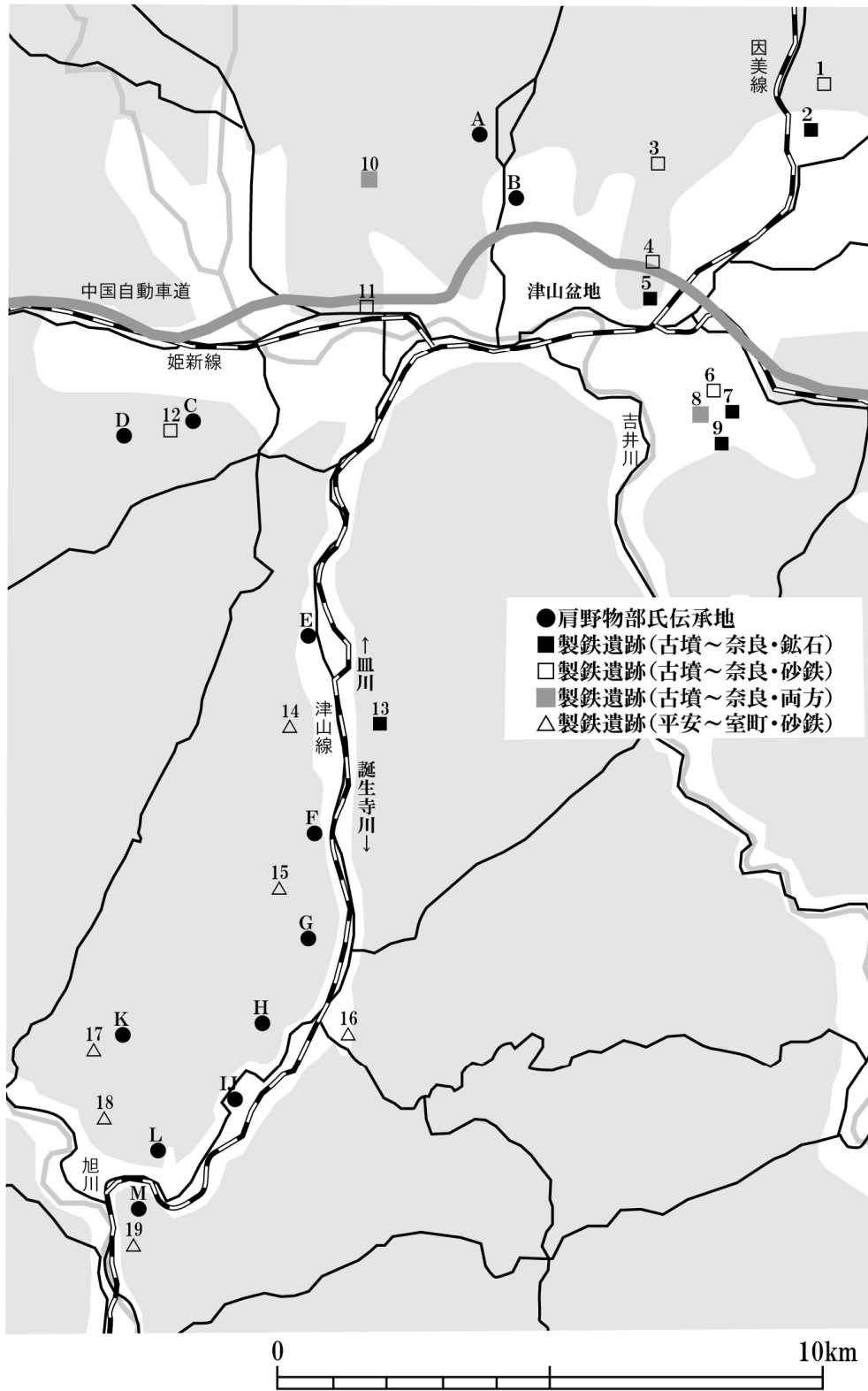
4. まとめ

津山市において大きな屋敷を持っていた肩野物部乙磨は、誕生寺川流域に移り住んだ後も屋敷を構えそして社寺を自ら建てるだけの財力があつた。また中世期においても乙磨の末裔もなお仏像や寺を寄進するだけの有力者であつた。その背景には乙磨以来の製鉄を生業としていたことによる蓄財が推定されよう。

以上のように岡山県津山市周辺は交野市の歴史を考える上でも非常に興味深く、今後引き続き製鉄を中心とする発掘調査に関して注視しなければならない地域であろう。

参考文献

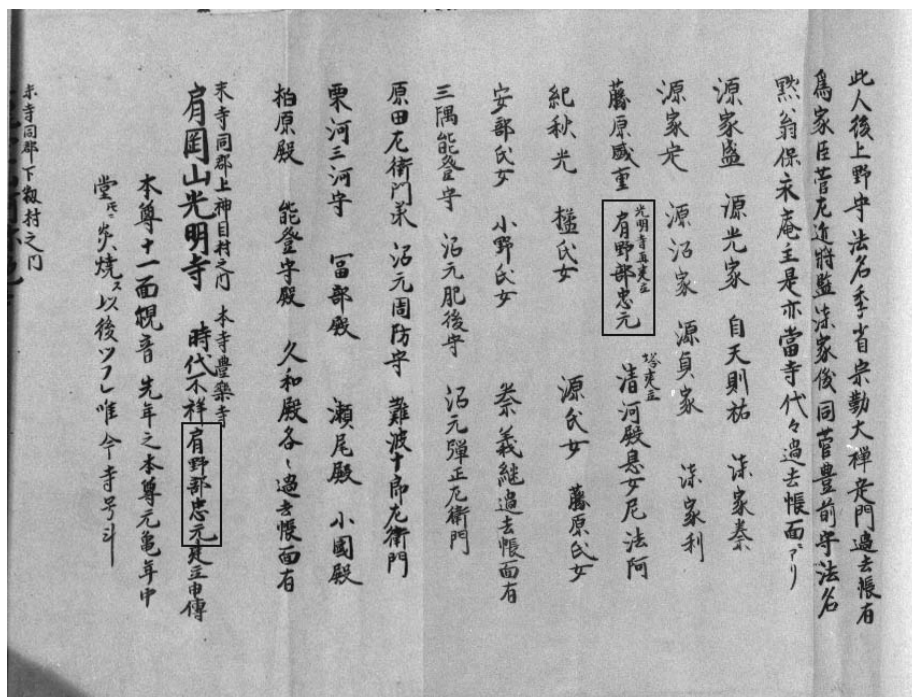
- 斉藤孝 1975 「美作二宮高野神社門客人神立像——そのイコロジーを中心に」『美術史』美術史学会
- 八木意知男 1977 「中山神社鎮座始末記」『美作女子大学研究紀要』第10号・『美作短期大学研究紀要』第22号
- 真弓常忠 1978 「古代製鉄祭祀の神々」『日本古代祭祀の研究』学生社
- 行田裕美ほか 1993 「美作一宮中山神社の出土遺物をめぐって——特に軒平瓦を中心に——」
- 真鍋成史 1994 「肩野物部と鉄・鉄器生産」『同志社大学考古学シリーズ 考古学と信仰』
- 平井昭司 1999 「岡山県誕生寺川流域から採取の鉄関連遺物の中性子放射化分析」『古代交野と鉄 I』（交野市埋蔵文化財発掘調査報告 1998- I）
- 大澤正己 1999 「岡山県誕生寺川流域における製鉄関連遺物の金属学的調査」
- 真鍋成史 1999 「岡山県誕生寺川流域の製鉄関連遺物の調査」『古代交野と鉄 I』（交野市埋蔵文化財発掘調査報告 1998- I）



岡山県北部における肩野物部伝承と製鉄遺跡の分布



岡山県久米南町仏教寺所蔵『竹林寺文書』
永享七年(1453年)



岡山市(旧建部町)豊楽寺所蔵『豊楽寺由緒書』
寛文十年(1670年)